

西沢一風と都の錦

——『元禄曾我物語』への一風の関与について——

井 上 和 人

『元禄曾我物語』（元禄一五年正月刊）で、都の錦は浮世草子作者として世に出た。勢州亀山の敵討を題材とする本作の執筆には、西沢一風の関与があったという。序文で都の錦が「大坂の作者西沢氏に口を添られ」と記し、同時に一風とおぼしき「西沢軒」なる人物の跋文があるためだ。では、それはどの程度の関与だったのか。この問題については、一風にも同じ題材による執筆計画がありながら、その計画を捨てて、都の錦に『元禄曾我』を書かせた——という説がある。この説は大方の支持を受けてはいるが、再考が必要ではないかと考える。

はじめに、『元禄曾我』の序文と跋文を見ておきたい。本書に一風の関与があったことをいうとき、その根拠となっているのは、まず第一にこの序跋だからである。

①都の錦自序（後半部）

……神風や伊勢国蓬萊山に於て敵討の事、人住ぬ田舎まで其沙汰まぢくなれど、咄上手に聞下手のみ多、魚魯のうらみ少なからねば、あはれ正説をしるして、孝子義士の手本にもせよかしと、大坂の作者西沢氏に口を添られ、右の手に力瘤を出し、伊東が孫に似相合て、外題ヲ御覽の通りに。

都の錦

印〔印〕「雲休堂」

②西沢軒跋文（全文）

孔孟地を變ば同じからんといふごとく、賤が小手巻くり返し、むかしを今になすならば、曾我と岩井が武功いづれも勝劣あらじ。建久四年五月雨と元禄十四年五月闇と、富士山土山似たり因たり。故に作者元禄曾我と改められしはいかにも尤じやとおもふて、悦聴の余りに筆をそへ、墨と硯の善中をしらせ侍る。

巳の八月庚申の夜

摂州浪速の遊民 西沢軒跋印〔印〕「清」

（叢書江戸文庫6『都の錦集』）

序文では、西沢氏の勧めによつて蓬萊山（実説では亀山）の敵討を取り上げたことを言い、また外題の由来にもふれる。一方、跋文は、土山（実説では亀山）の敵討と『曾我物語』とを対比、作者の改題に賛意を表し、作者と親しい間柄であることを記す。「大坂の作者西沢氏」と「摂州浪速の遊民 西沢軒」の両者を一風と見るならば、『元禄曾我』執筆に一風の関与があつたという論が成り立つことになる。

序跋の文面を根拠に、一風の関与を推定した説は、はやくからあつた。例として、水谷不倒氏『新撰列伝体小説史』や藤井乙男氏『浮世草子名作集』⁽²⁾ 解題などをあげることができる。その後、長谷川強氏が「一風は自分の計画を捨てて、都の錦に書かせた」との説を出した。長谷川説は従前の説を補強し、一風の関与の度合をより大きなものとした。では、長谷川氏の所説を確認してみよう。

長谷川強氏は『浮世草子の研究』⁽³⁾ で、次のように述べている。

同書『元禄曾我物語』序及び一風の跋により一風の周旋を得た事がわかるが、その八月（一風の跋の年月）に彼の浮世草子の処女作「東海道敵討」（外題は「敵討元禄曾我物語」、元禄十五年正月刊）が先づ成つた。前に一風はこの年五月九日の亀山の敵討や同月五日の事らしい土山の喧嘩などを集めた作の計画のあつた事を述べた。一風はこの計画を捨てて都の錦に書かせたのであろう。

右引用中にいう一風の計画とは、一風作『女大名丹前能』（元禄五年正月刊）に出る『武道国土産』を指している。『女大名丹前

能』巻五の一「面影わたる角田川」には次のような記事がある。

恋のゆかりをもとめ。思ひもよらぬ土山の旅寝：ひかへとゝむるくし屋の女。此宿の名物土産にめしませひといふに心付過ぎつるかふとの節句此所にてのけんくわかくれなし。此あたりにてハなきかと尋しかば馬方聞。しづかにく此十一屋といへるなり。かたればながいはなし。聞ば難波の書林より土山亀山それは取集。武道国土産と題し。桜にきざめひろむよし。それ御らうしませばなぞがとけます

（都立中央図書館加賀文庫本）

ところが、結局『武道国土産』は完成せず、元禄十五年六月に一字違ひの『武士国土産』が出た。版元は京都の菊屋七郎兵衛と江戸の須藤権兵衛。内容は「土山亀山それこれ取り集め」という予告と全く異なる。この辺の事情を、長谷川氏は次のように考証した。

なほ本書『女大名丹前能』五の一には前年五月九日の亀山の敵討や同年五月五日の事らしい土山の喧嘩（事実不明）などを集め、「武道国土産」と題し大坂の書林より刊行予定の事をいふ。一風は作中に自作を吹聴の例が多い。一風自身の計画とみたい。それならやつしではなく敵討や喧嘩など武士に関係ある事実事件を扱ふ作が予定されてゐたのである。しかしこの作は完成せず、十五年六月に「武士国土産」と題する書が京都菊屋七郎兵衛と江戸の須藤権兵衛の手で出された。この書は前述一風の父太兵衛と升屋五郎右衛門の手で出された「武道一覽」の改題本であるが、一風がこの刊行を周旋す

る事があり、題名を譲つて（一字違ひではあるが）自作の計画を放棄したやうである。

（前掲書八〇頁）

以上を要するに、一風には「土山亀山それこれ取り集め」た『武道国土産』なる作の計画があった。しかし、一風はこの計画を捨て、亀山の敵討の題材で都の錦に作品を書かせた。これが『元禄曾我』である。『武道国土産』という外題は『武道一覽』の改題に流用した——という理解で間違いないだろう。

長谷川強氏の所説は、中山尚夫・川元ひとみ・中嶋隆・江本裕の各氏が踏襲、現在すでに定説となっている感がある。右のうちは元論文は、序跋の文面と長谷川説を前提に、「一風が都の錦のスタートにかなり大きく関与していたことが推測される」とし、『都の錦が一風の影響下で「亀山の敵討」という史的素材をいかに利用して浮世草子化していったか、その過程を辿り、さらに長編的一篇に仕上げていった彼の方法を探る。一風の関与については、「都の錦は一風から何らかの資料提供を受け、また書くべき方向も教示されていたのではないか」と推測。『元禄曾我』が浄瑠璃・語り物等の演劇的趣向をもつ長編になっている理由を、一風の意向を受け入れたため、という。また、江本論文は、『元禄曾我』序跋および長谷川説を引用、加えて『風流源氏物語』と『風流神代巻』とを「一風の助言による企画」と推定し、「都の錦にとって西沢一風は、借りのある人物だった」とまとめる。『元禄曾我』については、「得意な唐土の引用が意外に少ない」ことを指摘した上で、「右の事実は一風との関係に起因しているだろう」とする。

このように、長谷川説は広い支持を受けており、さらに長谷川説を前提に、一風の関与を『元禄曾我』の内容面にまで及ぼそうとする見解も出ている。自分の執筆計画を捨ててまで、まだ無名の新人に処女作を書かせる——ありえない話ではない。しかし、そのためには両者の間にそれ相応の交わりが必要ではないか。このだれとも知れない者に、折角温めてきた題材を譲り渡したりはしないだろう。『元禄曾我』を書くまでに、都の錦と一風とはどの程度の交際があったのか。

都の錦が京から大坂に下った時期を、諸説は元禄十四年夏とする。あるいは、これよりやや早く、十四年三月中だったろうか。『風流神代巻』（元禄一五年正月刊）の跋文に、「こゝすみの江の鹽瀉より。指折かぞへて九ノ月。馴染をかさねし甲斐もなく。はるは都え帰るよし」とある。「住吉浦塩干」は『難波鑑』巻二に三月三日の行事として出る。それから九ヶ月というと十二月になるわけだが、『風流神代巻』の自序の日付は「ミの極月廿七日」とあり、これと符合するのである。石井兄弟の敵討が五月九日。西沢軒の跋文の日付が八月庚申（『五日』）。この時点で『元禄曾我』は書き上がったと見ると（詳しくは後述）、敵討から書き上げるまで三ヶ月。とはいえ、敵討直後に筆をとったわけではない。序文に「神風や伊勢国蓬萊山に於て敵討の事、人住ぬ田舎まで其沙汰まち／＼なれど、咄上手に聞下手のみ多、魚魯のうらみ少なからねば」とあることから、敵討が世間で評判になってからの着手と考える。ならば、序文に五月末の大蔵の記事があることも考慮して、着手は早くても六月に入ってから、やや幅をと

つて六、七月ごろと見たい。もし、一風から題材を譲り受けたのなら、これと同時期のはずである。三月に大坂に下ったとして三、四ヶ月。従来の説に従い、下坂を夏とすれば、さらに短くなる。はたして、この短時日の間に、自分の執筆計画を捨ててまで書かせるほどの交わりを結べるものだろうか。

この素朴な疑問をきっかけに、以下では長谷川強氏の所説を検証してみたい。

二

検証の要点は、都の錦が『元禄曾我』を書き上げたのが先か、あるいは一風が『武道国土産』の計画を中止したのが先か、ということである。『武道国土産』の計画が『元禄曾我』成稿以後も進行していれば、「一風はこの『武道国土産』の」計画を捨てて都の錦に書かせた」とはいえなくなる。そこで、明らかにすべきことは、

- (1) 『元禄曾我』の成稿時期はいつか。
 - (2) 『武道国土産』の計画はいつまで存在していたか。
- この二点である。

(1) 『元禄曾我』の成稿時期はいつか

前節で『元禄曾我』の着手を元禄十四年の六、七月ごろと考えた。これを上限として成稿の下限は西沢軒の跋文の日付八月庚申(一、五日)である。本文の成稿以前に跋文が出来る可能性もあるが、今の場合は考えにくい。跋文の内容からそう判断する。前に

引いた跋文をもう一度確認しておく。

跋文の筆者は、曾我兄弟と岩井兄弟および富士山と土山とを対比している。実説によるなら石井兄弟と亀山とあるべきところ。

それを岩井兄弟・土山とするのは、筆者が実説によって書いたのではなく、都の錦の作品をふまえて書いたことを意味する。次に、筆者は都の錦が題名を「元禄曾我」と改めたことに對し賛意を表す。『元禄曾我物語』は、目録題と柱題が「東海道敵討」、外題が「東海道元禄曾我物語」。都の錦は「東海道敵討」だった外題を「元禄曾我物語」に改めたものと考ええる。実際に刊行された『元禄曾我物語』の目録題と柱題に「東海道敵討」の書名が残っているということは、改題したときすでに「東海道敵討」の書名で一応の体裁が——どの程度だったか具体的にはわからないが——整っていたと推定できる。以上を考え合わせると、明らかに跋文は本文成稿後に書いたものといえる。よって、『元禄曾我』の成稿は「巳の八月庚申の夜」以前となる。

(2) 『武道国土産』の計画はいつまで存在していたか

この問題は、いいかえれば「一風が『武道国土産』の予告を『女大名丹前能』に書き込んだのはいつか」ということである。つまり、『女大名丹前能』の執筆時期を明らかにすればよい。また、『武道国土産』の予告が『寛潤曾我物語』後刷本にも載ることを、長谷川強氏が紹介している。こちらの予告もあわせて検討する。

A 『女大名丹前能』の執筆時期

『女大名丹前能』の刊行は元禄十五年正月。成稿が元禄十四年中であることは間違いない。問題はその時期をどこまで絞り込めるかだ。そのためには、本文の随所に書き込まれた演劇関連の記事が手がかりになる。以下、該当箇所を抜き出し検討を加える。

①芝居ハどれが時花ります。されば嵐三右衛門が。京にて座本をするハめづらしい事。荻野大和屋水木など大坂へくだる。惣じて役者は車輪のごとし。(巻一の三)

▼元禄十四年十月、京早雲座『今様能狂言』上演。大和屋甚兵衛と水木辰之助の暇乞いあり。同年十一月顔見世より、兩人とも大坂岩井半四郎座に出演。絵入狂言本『今様能狂言』には、大和屋甚兵衛と水木辰之助の暇乞いの口上が載る。同狂言の上演を『歌舞伎年表』は十月とする。顔見世は十一月だから、第五「釣狐」の「此月一はいならで。あふことはならぬ」という吉沢あやめのせりふからも、十月の上演と見るのが妥当だろう。

▼荻野左馬之丞、江戸より帰り、元禄十四年正月から京夷屋座に出演。同年十一月顔見世より大坂松本名左衛門座に移る。このことは、『役者略請状』(元禄一四年三月刊)と『役者二挺三味線』(元禄一五年三月刊)とで確認できる。

▼同十四年冬(十月?)、大坂嵐座『名残の盃』上演。嵐三右衛門、十一月上京の名残の狂言。嵐三右衛門は十一月二十五日京にて死去。嵐三右衛門の最期物語『嵐都の土』(元禄一四年一月刊)は、上京の経緯を次のように記す。

：来年ハ難波に出で大和屋が顔見世都にかはりたる取沙汰もないと洛中の貴賤なけ首の折から愛こそ嵐が出世の場大坂の評にハふくりんかけて十分の上文字をと思ひ立たる門出よし十月廿五日にハ花洛への発足と定め毎日の立ふるまひ

(東北大学附属図書館狩野文庫本)

これを信じれば、『名残の盃』の上演は十月二十五日以前。大和屋甚兵衛の下坂が京都で話題になっていることをいうから、『今様能狂言』と前後して十月に上演か。

*

②是はりうもの瀧と申狂言に拵たる大蛇也：生嶋様とやらんは江戸丹前の役者。：来年は東に御くだりのよし。(巻四の二)

▼生島新五郎、元禄十四年十月まで在京。『役者二挺三味線』江戸巻に「ゑもん殿は大坂岩井半四郎座に、下りまへまでつとめられた。もちろん此人(生島)は京に十月迄ゐられた。」(歌舞伎評判集成三巻二三〇頁)とある。同年十一月顔見世より、江戸に帰り、村山座に出演。なお、生島新五郎は京では万太夫座に出演していたが、『龍門瀧』の上演は未詳。⁽¹³⁾

*

③さん候私ハ敵役宇治右衛門がゆうれい。過つる顔見世前大坂片岡仁左衛門よりかゝへに参り。十月の末上方へ上る所に風の心地にさそハレ。道中にては武蔵野ノ土と成りぬ。(巻七の二)

▼元禄十四年十月(四日)、小野山宇治右衛門、江戸で死去。このことは、都の錦『御前於伽』(元禄一五年正月刊)巻一の三「小野山宇治右衛門卒死の事」に出ている。『御前於伽』には、「巳の

冬のかはミせより。大坂の芝居へ抱られ手付銀まで請取」つたが、役者仲間の暇乞いの盃で「河豚汁に。あミ塩辛を喰合せ命をうしなふ」。「十月四日の事なりとかや」とある。

右三点のうち、①②は元禄十四年十一月の顔見世にともなう役者の移動をいう。問題は一風がこうした情報を知ったのはいつかということ。大和屋甚兵衛・水木辰之助・嵐三右衛門は暇乞いの興行をしており、それを十月頃とした。とすれば、役者の移動の情報を得たのは十月頃か。しかしながら、役者の移動の情報が顔見世のどれ位前から流れていたかはつきりせず、まして一風は絵入狂言本も出版しており、商売柄情報が早かった可能性がある。十月をどこまでさかのぼるか明らかにできないのだ。そうすると、より確実なのは③小野山宇治右衛門の記事である。小野山宇治右衛門の死は、顔見世のために大坂に帰る直前、『御前於伽』によれば十月四日。すると、『女大名丹前能』の執筆は小野山宇治右衛門の死後だから十月以後である。では、下限はいつごろか。嵐三右衛門の死に注意する。嵐三右衛門は十一月二十五日に京都で客死する（『嵐都の土』）。ところが、『女大名丹前能』には嵐三右衛門の死に触れた記事が全くない。成稿の下限は——消極的な理由ながら——嵐の死以前と見る。以上まとめると、『女大名丹前能』の執筆時期は元禄十四年十月から十一月中旬頃までとなる。

B 『寛濶曾我物語』に載る『武道国土産』の予告
一風作『寛濶曾我物語』（一二巻二冊）は元禄十四年正月刊。

その後刷本に『武道国土産』の広告が載っている。この本は上田市立図書館蔵文庫本で、全十二冊のうち巻一〜九の九冊のみ存刊記は確認できない。ただし、広告末尾に「松寿軒 萬屋板行」とあるので、版元は大坂の万屋彦太郎である。長谷川氏が『浮世草子考証年表』で「末巻逸のため刊記不明の一本」として紹介するのがこの本に当たる。広告全文の紹介はまだなので、はじめに引用しておく。問題の広告は巻一の裏返しにある。

武 道 国 土 産 全部七冊

一之巻 長崎の遠目金

二之巻 作州の身持草

三之巻 土山のミツ櫛

四之巻 武州金龍山の米饅頭

五之巻 難波のなつ（以下ヤブレ）

六之巻 同長町の（以下ヤブレ）

七之巻 勢州龜山の仮名手本

右之本元禄十五年ノ正月吉日ニ出来

松寿軒 萬屋板行

まず、前提として確認しなければならないのは、この予告が一風の意志を反映したものかどうかである。版元の万屋彦太郎の独断ということはないのか。私は、この予告の掲載には一風本人が関与しており、一風の意志の反映したものだ——と考える。理由は次の三点である。

① 内容が極めて具体的である。

② 広告の掲載が『丹前能』刊行以前である。

③ 西沢と万屋彦太郎の間には出版上の提携関係がある。

この予告は、一見して明らかなように、内容・構成が相当具体的である。そのため、一風の関与なしに、このような予告を出すのは難しいと考える(①)。予告は、各地の事件を、一話につき一卷を当てて、全七巻七冊に仕立てる計画を示す。この計画は『丹前能』巻五の「土山亀山それこれ取り集め」というのと符合する。巻三に土山の喧嘩を、巻七に亀山の敵討を当てるつもりだった。他の五件の事件は未詳。あるいは、巻一「長崎の遠眼鏡」は、長崎で起きた高木彦右衛門と鍋島駿河守家来との喧嘩であろうか。この事件は、『世間咄風聞集』・『鸚鵡籠中記』・『甘露叢』等に見え、享保二年刊『諸国武道容気』(五巻五冊、版元京都菊屋長兵衛)巻四の題材にもなった。事件の起きたのは、『風聞集』『甘露叢』では十三年十二月十九日、『武道容気』では十三年十二月二十日、『籠中記』では十四年一月二十一日とする。¹⁶

一風の関与なしにこのような予告を出すのは難しいとしたが、では、『丹前能』巻五の一の記事をもとに、万屋が予告を作ったということはないのか。それもやはり無理である(②)。「丹前能」の刊行は十五年正月。この広告の掲載は、『武道国土産』の刊行予定を十五年正月と記すのだから、十五年正月以前。万屋彦太郎が『丹前能』の記事を見てこの予告を作ることとは不可能だ。仮に『丹前能』の版元が万屋彦太郎であれば、『丹前能』刊行前の原稿段階で、巻五の一の記事を知ることが可能かもしれない。

しかし、『丹前能』の版元は万屋ではなく、京都の金屋市兵衛である。万屋が『丹前能』刊行前に巻五の一の記事を知るのには難しい。とすれば、一風本人から万屋へ情報が流れたと考えざるをえない。

そうすると、一風と万屋彦太郎との関係を考える必要が出てくる(③)。一風の浮世草子で万屋彦太郎が版元になったものは、新版求版を問わず、今問題にしている『寛濶曾我』しかない。だからといって、一風と万屋彦太郎とが疎遠だったと考えるのは当たらない。一風の父西沢太兵衛との関係に目を転じてみる。両者の関係を示すものに、元禄十一年九月刊『将基指覚大成』と十六年七月刊『術象戯力草』がある。ともに西沢貞陳(＝太兵衛)の編集にかかる。『将基指覚大成』は西沢と万屋の相版。刊記は「元禄十一年寅ノ菊月吉祥日 西澤太兵衛／本町壺丁目 萬屋彦太郎」(東京国立博物館本)。ただし、万屋は入木なので、刊行当初から両者の相版だったかは不明である。「象戯力草」は西沢太兵衛が編集した最後の棋書。法師衍道後序によると、太兵衛は病床で本書の校合に努めたが、元禄十六年七月に没したという。太兵衛の自序があり、その署名と年記が「西澤貞陳序／書肆 松壽堂／元禄十六癸未年七月吉日」。下巻奥付に「書林 松壽堂 萬屋彦太郎」と入る(国会図書館本)。このように、西沢と万屋とは出版上の提携関係があった。しかも、太兵衛の最後の棋書を刊行している点に、両者のひとかたならぬ関係を想像させるものがある。とすれば、一風と万屋彦太郎の間に、新版の企画をめぐる情報交換があったことは、十分推定できるだろう。

以上の三点から考えるに、この『武道国土産』の予告は一風の意志を反映したものである。では、予告を出したのは——『寛濶曾我』の後刷の時点とは、いつ頃だったか。刊行予定を元禄十五年正月としているから、予告の掲載はそれ以前。決め手に欠けるものの、長谷川強氏の所説に従い、十四年の冬頃と考えるのが妥当だろう。

さて、ここまでで、『武道国土産』の計画はいつまで存在していたかを確かめるために、へA『丹前能』の執筆時期とへB『寛濶曾我』に載る『武道国土産』の予告を検討してきた。

A・Bから得た結果は、

A↓『丹前能』の執筆時期は、元禄十四年十月から十一月中旬頃までである。

B↓『武道国土産』の予告が出たのは、元禄十四年冬頃である。

予告の掲載には一風本人の意志が反映していた。

ということだった。一風が『丹前能』に『武道国土産』の計画を書き込んだのと、『寛濶曾我』後刷本に『武道国土産』の予告を掲載したのとは、ほぼ同時期の元禄十四年十月～十一月頃。つまり、この頃まで『武道国土産』の計画が進行していたことになる。一方、へ1『元禄曾我』の成稿時期はいつか述べたとおり、都の錦の『元禄曾我』は、西沢軒が跋文を書いた十四年八月には書き上がっていた。一風が「土山亀山それこれ取り集め」た『武道国土産』の計画を打ち出したのは、都の錦が『元禄曾我』を書き上げた後ののだ。『元禄曾我』は、一風が『武道国土産』執筆の計画を放棄し、かわりに都の錦に書かせたものではなかったの

である。

三

『元禄曾我』は、一風が自分の執筆計画を捨てて、かわりに都の錦に書かせたものではない——とすれば、一風の関与はどの程度のもと考えざるべきなのか。もとより証には乏しいが、出版と執筆という二つの側面において、一風の関与を考えておきたい。

まず、『元禄曾我』の出版に関しては、一風の助力を推定できるのではないか。それは、中山尚夫氏が言うように、一風が都の錦と版元河勝（升屋）五郎右衛門との間に立って仲介の労を取ったと考えるのである。一風と升屋とはどのような関係だったのか確認しておく。

かつて一風の父太兵衛は升屋と相版で出版を行っていた。

①貞享三年九月刊「五代宗桂象戯作物」(西沢太兵衛と出版)

刊記「貞享三歳寅九月吉日 川勝五郎右衛門／西沢太兵衛

板行」。但し、同年正月大坂柏原清右衛門刊『象戯手鑑』の

後印。

②貞享四年五月刊 武道一覽 (近世文芸資料一七)

大本七巻六冊。刊記「貞享丁卯年五月吉祥日 西沢太兵衛／

河勝五郎右衛門／板行」。元禄十一年増修本『増益書籍目錄

大全』は版元を升屋とする。

西沢と升屋とは過去に商売上の交渉があった。しかも、西沢太兵衛は両書の単なる版元ではなかった。『武道一覽』は、西沢貞陳(『太兵衛』)の持参した草稿を神保氏入道(『北条団水』)が加筆

したもの（神保氏入道序による）。（五代宗桂象戯作物）は、太兵衛が亡き朋友玄毫軒某の秘蔵していた書を追善のため出版したという（西沢氏跋による）。西沢太兵衛は両書の企画・編集段階から関わっていたのだ。それを出版した升屋は、西沢と関係の深い本屋だったのではないか。『元禄曾我』もその升屋から出た。『元禄曾我』には一風とおぼしき「西沢軒」の跋文があり、都の錦とは「墨と硯の善中」という。ならば、『元禄曾我』の出版に一風の仲介があったことは考えてよいだろう。

それでは、執筆面についてはどうだろうか。もう一度、状況を整理してみる。すでに述べたとおり、跋文は『元禄曾我』の内容をふまえて書いたものである。書いたのは八月五日。その二ヶ月後の十一月頃、一風は『元禄曾我』と内容の重なる『武道国土産』の計画を記した。計画はすでに具体的なレベルにあった。一風は都の錦に「あはれ正説をしるして、孝子義士の手本にもせよかし」と勧めておきながら、一方では自分も同じ題材による執筆計画を練っていたことになる。とすれば、都の錦が『元禄曾我』を執筆する際に、一風からの助力——題材の提供や浮世草子化の方法の教示といった——があったとは考えにくい。『元禄曾我』には都の錦の独自性が明らかなることから、そのように見えるのではないか。

はじめに、「亀山の敵討」という題材について。序文では一風の勧めがあったと言う。しかしながら、都の錦にとって、受動的に取り上げた借物の題材ではなかったようだ。後に宝永四く六年頃、都の錦は配流先の鹿籠金山で『播磨相原』を書く。その冒

頭（上巻「欲は非業のなかだち」、次のように記している。

憎や世に貧者とたにいへハ曾我殿に例ふ。しかあれと人は美目より心とかや。其曾我兄弟か心中後人の及ふ所にあらし。元禄年中に石江兄弟勢州亀山に名を残すの外（石江兄弟敵討の事、午の春難波に於て元禄曾我物語と名付、予か述作し侍るなり）いまた富を捨て義を立る者をきかず。嗚呼夢の外（ママ）の算用か更にうつとも思はれぬお侍の目覚し、語れハ口に津を生し、聞ハ心の明らかに、月も明石の播磨かた、赤穂の城主五万三千石纔に一墜の塵となりし由緒をそつと尋るに：

（東北大学附属図書館狩野文庫本／句読点を加えた）

『播磨相原』には狩野文庫本のほか、静嘉堂文庫本と関塚磨氏蔵本がある。三本はいずれも同じ書き出しをもつ。しかも、狩野文庫本は割注（右引用の「」内）で『元禄曾我』執筆のことという。このことは、「亀山の敵討」が彼なりに重要な意味をもつ事件だったことを示す。また、ことさら『元禄曾我』の書名を出したのは、『元禄曾我』が力を注いだ作品だったためか。「亀山の敵討」は借物の題材ではなかったと見ることができる。

次に、実説の浮世草子化についてはどうか。江本裕氏は『元禄曾我』を「武家物における長編化の端緒をなした」と評価する。実説を素材にした長編浮世草子。浮世草子の長編化は、一風が元禄十三年三月刊『御前義経記』で先鞭をつけた。だが、元禄十四年の段階で、実説を素材とした長編は、一風にはまだ例がない。元禄十一年八月刊『新色五巻書』は実説を素材とするが、長編の形をとらず、一卷に一話をあて合計五話を扱う。一方、『御前義

経記』と『寛潤曾我物語』（元禄一四年正月刊）は長編だが、『義経記』と『曾我物語』を下敷きにする。実説を素材とした長編は、赤穂事件を扱う『傾城武道桜』（宝永二年八月刊）まで待たねばならないのだ。もともと、予告だけならば、『伊達髪五人男』（宝永三年正月刊）の予告が先に『風流今平家』（元禄一六年三月刊）に載っている。この予告を見ると、『伊達髪五人男』は当初から全五巻を費やして雁金五人男を扱う計画だったことがわかる。すると、実説を素材にした長編の計画は、元禄十六年までさかのぼる。しかし、それでも『元禄曾我』以後であることには変わりはない。実説を素材とした長編化は、都の錦の方が一風に先行したのである。

長編化の方法にも都の錦独自のものがあり、すでに指摘を受けている。山本卓氏⁽²⁶⁾は、都の錦の浄瑠璃利用の方法を「二段構え」とし、「表面的に示したり匂わせた作品や要素にもう一段の奥を仕組んだり、あるいはそれを用いずに肩すかしをくわせたりする」という。また、『元禄曾我』にも、いわゆる学識の誇示がある⁽²⁷⁾。学識の誇示が、都の錦の特色であるのは周知のとおり。そのうち巻四の三「辻堂に衣かたして尼宿」の典拠に関し、神谷勝広氏⁽²⁸⁾は「元禄曾我物語」にあえて入れた仏教がらみの文章「巻四の三」は、『愚迷発心集』『撰集抄』の仏教的美文を組み合わせたものである」と指摘する。抄物や俗解書等に拠りながら、あたかも自分の学識のように見せる手法——この後も多用する手法を、都の錦は『元禄曾我』ですでに用いていたのである。

「亀山の敵討」という題材。実説に基づく長編化。そして、長

編化の方法。題材・方法ともに、都の錦の独自性は明らかだと考える。

おわりに

西沢一風と都の錦。『元禄曾我』の執筆をめぐる、『元禄曾我』は、一風が自分の執筆計画を放棄し、かわりに都の錦に書かせた」という説があった。ほぼ定説となっていたこの説だが、『武道国土産』の予告と『元禄曾我』執筆の前後関係を確認した結果、成立し得ないことが明らかになった。では、一風の関与はどの程度だったと考えればよいのか。都の錦が『元禄曾我』を執筆していた頃、一風も同じ題材による『武道国土産』の執筆計画を進めていた。また、『元禄曾我』を見るに、都の錦の独自性は明らかである。こうしたことから、たとえ一風の関与があったとしても、それは出版の仲介といった程度であり、執筆への関与を過大に見積もるべきではない——と考えるものである。

注(1) 水谷不倒氏『新撰列伝体小説史』（水谷不倒著作集一・昭四九・中央公論社〈初出 昭四・春陽堂〉）二二二頁

(2) 藤井乙男氏『浮世草子名作集』（評釈江戸文学叢書・昭一二・大日本雄弁会講談社）解題八六頁

(3) 長谷川強氏『浮世草子の研究』（昭四四・桜楓社）

(4) 中山尚夫氏『「元禄曾我物語」について』（『文学論叢』五〇・昭五〇・一一三）

(5) 川元ひとみ氏『都の錦「元禄曾我物語」考』（『大妻国文』二〇・平一・三）

(6) 中嶋隆氏『都の錦集』(叢書江戸文庫6・平一・国書刊行会) 解題三五六頁

(7) 江本裕氏「都の錦―数奇な運命を辿った文人―」(『国文学 解釈と鑑賞』・平六・八)

(8) 古典文庫三五四(昭五一)の影印による。

(9) 近世文学資料類従・古板地誌編一九(昭五二・勉誠社)による。

(10) 湯浅吉美氏『日本暦日便覧』(昭六三・汲古書院)による。

(11) 伊原敏郎氏『歌舞伎年表』(昭三一・岩波書店、土田衛氏『歌舞伎年表』補訂考證 元禄篇其六)(『愛媛大学法文学部論集・文科編』七・昭四九・一二)、中嶋隆氏『元禄末期の浮世草子と役者評判記』(『初期浮世草子』二・平六・古典文庫)。以上を参考にした。

(12) 該当箇所は以下のとおり。

《第三「花子」・水木辰之助》：「又来年ハ。大坂岩井半四郎しばいから。せひ下つてくれひと有ゆへせひなう下ります。大坂ハこきやうなれば。かへるがうれしいはずでござります。なじミがほんでござりますハ。皆様にわかれ参りますがかなしうて涙がこぼれます。去年から一年のたつハ少の間。おつ付来年の霜月にハ罷上り。御めにかゝりませぬ。皆様御無事でござりませ

《第五「釣狐」・大和屋甚兵衛》：「扱明年ハ。大坂岩井半四郎かたより。すててくれますやうにと有て罷下ります。来年の霜月にハ罷上りめでたふ御めにかゝりませぬ。：(さくの前あやめ)是いとまごいハ跡にしたがよい。ついてるても。此月一はいならで。あふことハならぬ。わかるゝ事を思へば。おれハ涙がこぼれてかなしい。

(新編稀書複製会叢書一八)

(13) ただし、同年に早雲座でも『龍門灘』を上演したらしい。『役者色景図』(正徳四年二月刊)京の巻「篠塚次郎左衛門」の項に、「十四年以前已ノ早雲座で、龍門ノ灘ニ敵役せられしとは黒白のちがい。」(歌舞伎評判記集成五卷三六七頁)という記事がある。

(14) 東洋文庫所蔵岩崎文庫本による。

(15) 長谷川強氏『浮世草子考証年表』(昭五九・青雲堂書店)一〇頁。同氏「その後の西鶴」(『浮世草子新考』・平三・汲古書院)六八頁も、この広告に言及する。

(16) 長谷川強氏『元禄世間咄風聞集』(岩波文庫・平六)二〇六頁注を参考にした。

(17) 長友千代治氏『西沢太兵衛と出版』(『近世作家・書肆研究』・平六・東京堂出版)を参考にした。

(18) 披見した東京国立博物館本は後印本。西沢・万屋連名の刊記のある丁(二〇丁目)の次に、「京都書林／寺町通松原上ル町西側／菊屋七郎兵衛 板行」と記した丁(二二丁目)を追加してある。

(19) 注(15)に同じ。

(20) 注(4)に同じ。なお、一風と升屋の関係は、長谷川強氏『武士国土産』その他「考証三条」(『浮世草子新考』)もふれる。

(21) 注(17)に同じ。

(22) 斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成』(昭三七・八・井上書房)による。

(23) 中嶋氏注(6) 解題三四九・三五〇頁

(24) 若木太一氏「都の錦「播磨相原」をめぐる―関藤珍氏所蔵本の紹介を中心に―」(『江戸時代文学誌』一・昭五五・一二)

(25) 江本裕氏「所謂武家物の展開について―浮世草子の行方をさぐる―」(『近世中期文学の研究』・昭四六・笠間書院)

(26) 山本卓氏『元禄曾我物語』攷一浄瑠璃利用と実録への展開を中心に―(『国文学』六八・平三・一二)

(27) 伊勢神宮の縁起(巻一の二)、子犬が御帳に迷い込んだ故事(巻二の二)、小栗判官の実説(巻二の三)、文宣王の金言他(巻三の二)、謎の奥義(巻五の二)、浄瑠璃・歌舞伎の起源(巻五の二)、浅草寺の縁起(巻五の三)などがある。

(28) 神谷勝広氏「都の錦の学識と手法」(『近世文芸』五五・平四・二)